

「アメラジアンスクールと平和学習1日目」

文責 大脇 公介

この日は、沖縄におけるアメラジアンの子供たちの教育状況を学ぶためにアメラジアンスクールを訪れ、また、平和学習のために沖縄中南部をめぐるという2本立てである。

ー8:00 アメラジアンスクール見学、野入先生にお話を伺う

アメラジアンスクールに到着。この日の野入先生は、青いエプロンを着ていらした。そのため、2日前に大学でお会ったときとは打って変わって、幼稚園の先生のような雰囲気になっていて驚いた。その野入先生に案内して頂いて、スクール内を巡った。いたるところに、子どもたちが制作して貼った掲示物や、ポスターがある。可愛い字で日本語や英語が書かれている。廊下に設置された子供たちの本棚にも、日本語・英語が入り乱れている。



そして、いよいよ教室に入る。（この時私はとてつもなく緊張していた。なぜなら、6、7歳の子に流暢な英語で話しかけられて聞きとれなかったり、にこやかに返答することができなかったりするかもしれない、というネガティブな想像をしていたからである！）授業が始まるまでしばらく時間があつたので、教室では子どもたちがはしゃいでいた。その教室で彼・彼女たちは、はきはきと日本語で話していた。こうした学校を訪れた経験のなかった僕は、肌が白い子どもと、黒い子ども、そして黄色い子どもたちが、同じ言葉を使って、互いの名前（それもまた日本らしい名前だったりアメリカらしい名前だったり）を呼び合い、会話しているその光景が、とても衝撃的だった。私たちが話しかけると、みんなで恥ずかしがりながらも答えてくれる彼らが、とても愛くるしかった。



一通り校舎内を巡った後、外のベンチ（子供たちの休憩スペース？）で野入先生からお話を伺い、質疑応答。アメラジアンスクールという、「普通」とは外れた学校を運営する苦労や、ここに通う子供たちの事情・アイデンティティ意識、また、アイデンティティ形成のための取り組みなど、現場ならではの興味深いお話をたくさん聞くことが出来た。子供たちの籍を置かせてもらっている学校との兼ね合い。子供たちに対する世間の目。太平洋戦争に関する平和教育のむづかしさ。挙げるときりがないほどであるが、特に印象に残ったのは、スクールでの日本語と英語の学習比率を決める際に参考にしたのが朝鮮学校であるということ、韓国のアメラジアンスクールとも交流があるという



ことであった。日韓が同じ課題を抱えているのだと知った。

ー10:00 沖縄大 澤田ゼミナールと合流、資料館巡り

アメラジアンスクールまで迎えに来て下さった澤田ゼミナールのみなさんと合流。2日間の平和学習初日のこの日は、平和祈念資料館と韓国人慰霊塔、平和の礎・ひめゆり平和祈



念資料館・南風原文化センター、陸軍病院壕跡を案内して頂いた。バス車内では、あきさんとあっこさ



んの掛け合いで楽しい移動時間。しかし目的地に着けば一転、事前に準備してくださったレジュメを用いての詳細な解説。その真剣さに自然と背筋が伸びた。以下に詳細を記す。

ー11:00 韓国人慰霊塔・平和祈念資料館・平和の礎

最初に訪れたのは、平和祈念資料館に隣接する韓国人慰霊塔。第二次世界大戦が、沖縄だけでなく朝鮮をも巻き込んだものだった、ということ再認識させられる場所だった。先日訪れた嘉数高台の「青丘の塔」とは対照的に日本による戦争を批判する内容になっている、との指摘が興味深かった。



次に、平和祈念資料館に向かった。展示室の冒



頭、沖縄が日本になり、やがて戦場となるその一連の流れのきっかけとして、薩摩藩による琉球侵略が紹介されていた。鹿児島出身の私に重くのしかかる記述だった。これまでに薩摩と琉球の関係に関心を払ってはいたが、それはひとりよがりな、一方的な視点でしか歴史を見て

いなかったのだと思い知らされた。また、展示の中には私たちが内地で生まれ育った故に知らなかったり、思いもよらなかったりする「歴史」があった。しかし沖縄のみなさんに伺って分かったのだが、そうした差は沖縄県内にもあるのだそうだ。つまり、基地の多い地域では基地問題をテーマとする平和学習が行われ、戦跡の多い地域では歴史をテーマにして平和学習が行われるのだ。平和を希求する気持ちはもとより、歴史を学ぶ作法を体得することができた。

ー13:00 ひめゆり平和祈念資料館

「ひめゆり」という言葉を聞きなれているのは、毎年夏になると放送される終戦記念ドラマのせいだろうか。しかし資料館を訪れば、そうしたドラマは美しく編集された物語にすぎないのだと思ひ知る。資料館では自分たちよりもはるかに年下の少女たちが、「捨て石作戦」と牛島満司令官に翻弄されて命を落とすに至る経過を感じることができる。

牛島満は鹿児島で育った。地元鹿児島では、西郷隆盛に並ぶ人格者であると語り継がれている。その一方で、沖縄では、民間人の被害を顧みない冷血非情な軍人というイメージで語られる。ここひめゆり平和祈念資料館では、牛島満を通じて、被害者と加害者とが戦争にまつわる歴史認識を同じくすることの難しさを感じた。



ー16:00 南風原文化センター資料館・陸軍病院壕

南風原文化センターは、壕をその展示の主題にしている。それは、この地にひめゆり部隊が活動した陸軍病院壕が多数現存し、且つ、現在も「たくさんの人に見て学んでもらいたい」という思いのもとで壕が一般公開されているからである。この資料館の特徴である、実際に手にとって感じるができる展示のひとつである、当時のベッドを復元したものに横たわることができた。



資料館を出てすぐの場所には、戦時中にひめゆり部隊が作った食事を担いで歩いた「飯上げの道」が続いている。ここを通って見学可能な20号壕に向かう。その途中で、鎮魂の碑、憲法9条の碑、そして鎮魂と平和の鐘

に立ち寄った。「誰かに聞こえるように」ではなく、沖縄で見た色々をその音と共に「自分に刻み込むように」鐘を鳴らした。20号壕の中は、当然ながら真っ暗だった。ここで負傷兵が寝食し、手足の切断が行われ、ひめゆり部隊が介助し、そして最後には青酸カリで仲間を殺すことが行われた。資料館でそれを理解したつもりでいたが、正直に言うと、壕の中



沖縄 FW3 日目（10月11日）

でそれを想像するだけの度胸と覚悟が私には無かった。

ー17:30 沖国大に到着、解散…せず

中南部を巡る平和学習を終えて、沖国大に戻ったのは、日が傾き始めた頃だった。御世話になった澤田ゼミナールみなさんにお礼をして解散…と思いきや、別れを惜しんで沖国大の中にあるカフェへ。

（ちなみに澤田ゼミのみなさんには翌日もお世話になる。）この時ばかりは勉強のことを忘れて、その場にいた10月11日生まれの人3人（!）の誕生日を祝いながら、今日一日の疲れを癒したのだった。

（カフェで撮った集合写真）

